

Partners Action



リサイクルガラスで創られた「翠角彩」



切子体験では、オリジナルグラスや小皿を製作することができる。

「捨てない努力」から生まれた色彩
 中金硝子にはSDGsへの深い共感と実践があります。吹きガラスの世界、特に2枚のガラスを重ねる製法では、一度壊れたものや製作過程で出る端材を再利用することは不可能とされてきました。溶かしても元の色を正確に再現できないため、これまででは産業廃棄物として捨てるのが業界の常識だったのです。しかし、中金硝子には「もったいない」という強い思いが長年ありました。10年、20年という歳月をかけて、色調合のデータを蓄積し、リサイクルへの道を模索し続けました。その試行錯誤の末に誕生したのが、リサイクル品を100%使用した、美しく透き通るようなガラスです。

その色は、新選組の羽織を思わせる「浅葱（あさぎ）色」や、晴れ渡る青空、あるいはヨーロッパの女王の瞳のような輝きを放ちます。かつては「色が安定しない」という理由で「ロス」とされてきた個体差を、あえて「その時だけの味」として捉え直し、再び命を吹き込む。この捨てない努力から生まれた製品は、まさに現代の「江戸の粋」と持続可能な精神が融合した、長年の努力の結晶なのです。

体験から広がる共感の輪

こうした製品は、オンラインショップだけでなく、自治体の施設などでも手に取ることができ、しかも、中金硝子が大切にしているのは、製品を売るだけでなく、現場で素材と向き合いながら習得するセンスが必要だ」と言われるこの世界で、新しい世代の視点が入ることは、伝統に新たな風を吹き込むことでしょう。

人間が作るという価値を未来へ

現在、中金硝子には大きな変化の兆しがあります。熱く過酷な現場を敬遠する若者が多い中、「どこしてもガラスをやりたい」という強い熱意を持った若い女性が新たに弟子入りし、愛娘も家業を支えています。「デザイン画をそのまま形にするだけでなく、現場で素材と向き合いながら習得するセンスが必要だ」と言われるこの世界で、新しい世代の視点が入ることは、伝統に新たな風を吹き込むことでしょう。

現在、中金硝子には大きな変化の兆しがあります。熱く過酷な現場を敬遠する若者が多い中、「どこしてもガラスをやりたい」という強い熱意を持った若い女性が新たに弟子入りし、愛娘も家業を支えています。「デザイン画をそのまま形にするだけでなく、現場で素材と向き合いながら習得するセンスが必要だ」と言われるこの世界で、新しい世代の視点が入ることは、伝統に新たな風を吹き込むことでしょう。

AIが台頭し、人間が直接手を使わなくてもよくなりつつある時代だからこそ、人間が汗をかいて作ったという過程に味わいがあり、そこに宿るストーリーが使う人の心を豊かにします。中金硝子が発信するメッセージは、伝統の維持に留まりません。物を大切に作る心、手間暇をかける誇り、そして失敗を味に変える柔軟な発想。江戸から続く職人の精神をガラスに込めて、中金硝子はこれからも「日本の心」を世界へと発信し続けます。

ジェイスパートナーズメッセージ

Massage

◆未来への責任と豊かさをガラスに込めて

私たちが守りたいのは美しさだけではありません。作り手の知恵や地域の記憶、使い手の暮らしの時間まで含めて、ガラスの価値だと考えています。環境に配慮するとは、資源を減らすだけでなく、長く使いたくなる道具を増やすこと。受け継げる器は、結果として廃棄を減らします。大量生産の便利さの隣で、私たちの手仕事は大変だけれども確かな選択肢です。一つのガラスが、使う・語るという行為を通じて、未来への責任と心の豊かさ、楽しさを表現する。そのようなものづくりをこれからも伝え続けていきたいと思ひます。



2026年1月、中金硝子はJACEより「SDGs活動認証」を受けました。写真は授賞式のもの。

中金硝子総合株式会社
 代表取締役 中村清吾さん(左)
 と取締役 岩淵道子さん(右)

中金硝子総合株式会社について

- 住所：〒132-0035 東京都江戸川区平井 2-11-29
- 創業：1946年
- 設立：1948年
- 事業内容：ガラス製品企画、制作、販売
- その他取り組み例：オンラインショップ、切子体験、伝統工芸産学公プロジェクト

<https://nakakinglass.co.jp/>



Company



音響の増幅器としてのガラス製品「響奏」は心に響く音色を奏でる。



モノが持つ価値を社会に今一度問う

東京都江戸川区に拠点を構える中金硝子総合株式会社(以下、中村硝子)の歴史は、昭和21年、戦後間もない混乱期にまで遡ります。創業者の中村金吾氏は江戸ガラス(※1)の職人として、戦前から類まれなる才能を発揮してまいりました。当時の工場の経営者からもその腕を惚れ込まれ、戦時中もその技術を頼りにされるほどだったといひます。戦争による中断という困難を乗り越え、戦後に独立して自らの城を築いたその背景には、一人の職人としての揺るぎないプライドがありました。現在、その情熱は次世代へと引き継がれています。

手間暇を惜しまない美学

中金硝子が最も得意とするのは、「色被せ(いろきせ)ガラス」という技法です。これは色の異なる2層のガラスを重ねて吹くもので、主に江戸切子の素材として使われます。このガラス作りには、



中金硝子の製品には一つひとつに違った味わいが宿る。

※2：主に炭酸ナトリウムとシリカを主要成分とするガラス。製造過程でのエネルギー消費が比較的少なく環境への影響も軽減される。

一期一会の価値

「繊細な模様を切子で施し、手で磨き上げようとする発想そのものが、手間を惜しまない日本人らしいオリジナリティである」と中金硝子は考えています。かつての職人たちは、「この模様は自分にしかできない」といった強い誇りを持ち、自らの世界観を製品に投影してきました。その職人魂と創意工夫こそが、機械による量産品には決して真似できない、一点物としての価値を生み出しているのです。

ヨーロッパのガラスとは異なる日本独自の進化の歴史が刻まれています。ヨーロッパのカットガラスの多くはクリスタルガラスで作られ、薬品(酸)で表面を溶かす「酸磨き」で光沢を出します。しかし、中金硝子が守り続けているのは、東京の地で花開いたソーダガラス(※2)による製品です。ソーダガラスは薬品では磨けないため、全ての工程を人の手で行う「手磨き」が必須となります。

<参考>中金硝子の江戸ガラス製品ギャラリー



ひっくり返すと富士山が現れる「逆さ富士」

繊細な菊繋ぎ切子とカットインクが印象的な「煌き」

中をぞくと花切子が映り込んで見える「万華鏡切子」



ジェイスパートナーズ
 アクション

江戸硝子の伝統と革新を吹く
 捨てない努力と職人の誇り
 中金硝子総合株式会社